

〈翻 訳〉

三浦梅園『価原』ⁱ

Miura Baien's Kagen

田 中 秀 臣

TANAKA Hidetomi

キーワード 三浦梅園、『価原』、遊手、貨幣、物価

価原引

現在の風習では、人々は財産を失った貧しい民を買って、使用人にしている。一年働く者もいれば、半年働く者もいるし、日雇いの者もいるし、何年も働く者もいる。雇われたり解雇される仕方は、各地の風習がある。これらのすべてを奉公と知っている。しかし近年では、凶作の年にはこれらの者を雇わず、そのために生活のために職に就くことができないものが多い。豊作の年には、労賃は騰貴して、そのために使用人を買うことができない者も多い。また今年のように、もし麦価でこの労賃を測れば、健康な使用人を買うと十石にもなる。虚弱な者でも四石、三石になることはない。したがって、収入を考えると、雇用した労働は結局その労賃に見合ったものでは到底ない。上田氏は疑問に思われ、御下問があった。ああ、私三浦晋はつまらない人間である。腹の加減で食事をし、自分の身の丈を測って服を着ているだけで、どうして他の物事を知っていようか。しかしそうはいっても、貧しい心で考えても、多方面にわたってこのことの関係することは小さくないと思っている。したがって、自ら軽率に判断せずに、その原因を慎重に考え、そしてその影響に考えを及ぼそう。この思索の成果を小冊子にまとめ、題名を価原として、上田氏の質問への答えとしたい。故事にある取るにたりない者の憂国の感情に似ているとはいっても、実は天が崩れ落ちるといった起りえない出来事を憂っている愚かさと同じである。玉には似ているが実は石にしかすぎない私の考えで、どうしてうまく天を補うことができようか。一読したらこれを軒下に置きなさい。そうしないとあなたを宋人と同じような愚者だと思ふ者がでてくるだろう。

安永二(1773)年 夏 四月壬辰

三浦晋

『價 原』 豊 二子山人 三 浦 晋 著

『書経』の大禹謨篇に、「帝王の徳は政治をよくすることであり、政治とは民を養うことである。それには水・火・木・金・土・穀物という生活必需品がよく提供できるようにし、その上で徳を正しくし、物の利用が便利になるようにし、生活が豊かにすることを調和をもって行うことである」と書かれている。水火木金土穀、これを六府といい、正徳・利用・厚生、これを三事という。後世の統治の仕方は千術万法があるというけれども、この六府三事以上のものではない。

大禹謨篇で水火木金土穀といったものを、大禹謨篇以後では穀を土に統合して、五行とも五材ともいった。天下の至宝というものは、この六府である。大禹謨篇の後に書かれた洪範篇では、これを五行と謂って、箕子ⁱⁱが延べたのが、禹謨篇とは違う解釈の始まりであって、後世における五行家の禍のもととなった。すでに『尚書』ⁱⁱⁱにきちんとした出所があるので、後世の人はこれを自由に解釈することはできないでいた、箕子の後の権威ある学者たちも、いろいろな曲説を設けて調停することになった。だが天地の条理の見地を、大禹謨篇と照らしあわせてみれば、箕子の誤伝を覆い隠すことはできない。

古代の聖人といわれる人は、天下を支配する人である。これを王者と呼んだ。王者の材は水火木金土穀である。城郭、橋梁、家屋、壁、船、車両、農機具、釜、鉄瓶、刀剣、陶器、瓦、生活必需品、厨房用具、衣服、飲食物、これらの何が五行に入らないものがあるだろうか。これらは天下の至宝であって入手しやすく、充ち足りやすく、過不足ないので、決して得難いものとはいえない。たとえ連城の壁が四方八方を照したとしても、千の家、万の家に灯火が満ちているのに比べれば、比較することもできない^{iv}。このように得難い宝は手に入らなくてもすむものである。得やすい宝は、人びとの生活にとって少しの間も離すことのできないものである。昔は人の性格が質朴であり、奢侈や文飾に走らなかった時代では、五行で用が足りていた。世は移り、風俗も変化して、次第に奢り飾る世になって、得やすく充足しやすいものが財であることを忘れ、いたずらに得難く供給し難いものを求めて、そのようなものを至宝と思うようになった。その至宝は、役に立たないものであって、一方で王者の宝は(五材のように)有用のものである。

わが国は漢土に比較して、遅く文明が開けたので、風俗もたいへん素朴な状態が続いた。そのため銀は四十代天武天皇の白鳳三(六七四)年に対馬で産出し、銅は四十三代元明天皇の和銅元(七〇八)年に武蔵の国から産出され、金は四十五代聖武天皇の天平二十一(七四九)年に陸奥の国から上貢されたといわれているが、それほど大量ではなかった。銭の通用も白鳳以来あったけれども、いまのようなことはなかった。博多に唐船が渡来した頃は、宋銭

でもって物財の支払いをし、つい最近の室町殿^vの時代までも明朝の永楽銭でこと足りた。東山殿^{vi}は国費に不足して、三度まで明に財政の援助を懇請したが、そのなかでも文明の頃の一件では、十万貫を(明から)援助を受けなければ、財政に不足するとなげかれた。十万貫がいまやどれほどの価値をもつであろうか。今の富者一人の財産にも満たない。だからいまの銭や貨幣の多いことは、説明しなくてもわかるだろう。これほどまでに財貨に富んだ世を、金銀が少ないように心得るのは間違いである。少し考えた程度では、金銀が少なければ、世の中は貧しく、金銀が多ければ世の中は豊かになるものかと思うけれどもそうではない。ここでじっくりと天下の至宝が、六府に過ぎないことを考察すべきである。蘇東坡がいったように、「天が珠玉を雨のように降らしても寒がる者は珠玉を着物の代りにすることはできない。天が宝玉を雨のように降らしても飢えている者はこれを粟とすることはできない」^{vii}。金銀・瑠璃・碑磔・碼碯・琥珀などといって、世間では賞玩するけれども、人々の生活には何の役にも立たないので、王者はこれらを宝としない。このために古代の王者は五官を設け、水火木金土にそれぞれ長を置いて治めたのである。金とは五つの金の総称である。分けていえば、金銀銅鉛鉄、合わせていえばすべて金である。五金のうちでは鉄が至宝である。銅がこれに次ぐ。そして鉛がこれに次ぐ。なぜならば、鉄は安価でその用途は広い。人々の生活に一日でもなくてもこまる。銅は器物としての用途があり、鉛は軍で用いられる。金銀はあればあったで使い道があるが、なくてもまずすんでしまう。だから、鉄以外の金はこの国では遅く使われ出したが、鉄は神代の昔からあったらしい。金銀は諸財と交換する手段としての用途がある。金銀ならびに銭、これを幣という。希少で小さい。諸財が重く大きいため、移動しにくいのを運びやすくするものだから、その用途は船や荷車に近いものがある。金銀は貴重であり、大きな物を運ぶことができる。銭は価値があまりなく量的には多くあって、小さな物を運ぶのにいい。価値の高低や用途の別があるので、金と銀は分けることができ、銀と銭は分けることができる。だから、いま金銀という呼称の中には銭もまたそのうちに含まれている。何よりもまず天下の大勢を考慮する人は、よく財の有用無用を見分けなければならない。たとえば国内にこのように豊富に存在する金銀が、いますべて尽き果てたとしても、他の五材があれば、人々の生活が成り立たないということがあろうか。金銀は各所で産出する場所があるが、それでも佐渡の山が天下に一番である。上杉謙信が佐渡を攻め取り、金を採掘したので、国用が豊かになったために、豊臣秀吉がこれを知って公料とし、金を採掘したが産出しなかった。慶長五(一六〇〇)年、関ヶ原の戦いが終わった後になり、銀の採掘量がたいへんなものがあった。銀の産出が終るとこんどは金が産出された。今に至っても絶えていない。

さて銭は、白鳳以来、元明天皇の和同開珎、孝謙天皇の万年通宝以来、絶えず鑄造されてきたが、甚だ少ない量であったと思われる。他の領国で使われてきた銭を、京銭といっ

た。これは北条氏康が、東国を領地にしていたときに、当時では永楽銭が高価で、他の銭四、五文をもって、一文に換えたので、他銭を禁じるほどに、関東では専ら永楽銭が通用し、他の銭を鑿^{びた}と^{びた}いって卑しみ、京都や近畿では他の銭が盛んに流通していたので、これを京銭と称した。慶長の頃、銭を鑄造したようで、稀に慶長通宝を見ることがある。輪郭や字様が、明銭にたいへん似ている。開元通宝、乾元大宝の銭は異国で千年も前に通用した銭であるが得やすく、他方で慶長通宝は得難いので、これはいくらかも鑄造しなかったためと思われる。慶長十三(一六〇八)年、永楽銭を禁じ、京銭を用いたので、永楽銭は多くが鑄潰されて、流通することがなくなった。寛永十三(一六三六)年、徳川家光将軍が、江戸と近江坂本の二か所で、寛永通宝を鑄造させてから、世間で財や用役が豊かになり、諸貨の流通が自在になったので、諸財貨を軽んじて、金銀を尊ぶ風習となった。金銀の価値を高く考え、六府の価値を低く考えた。六府の価値を低く考えれば国家の根本は薄弱となる。詳細にその理由を説明しよう。たとえばここに一つの島がある。土地・人民が十分にあり、米粟・布帛・魚塩を他の島の世話になることなく一切が事足りている。金銀だけが無いのだが、人々は粟を生活必需品や庸役と交換しているので、金銀が貴いものだとすることを知らないで生活することができるのではないだろうか。ここに順々に銭を一万その島に流通すれば、一万の銭はその一島の用を足すことができるだろう。一万より増やして十万の銭にすれば、十万の銭は一島の利用をみだし、一万の銭では決して用をみたさなくなるだろう。

初めは島の諸用は一万の銭と釣り合っていて、米が一石五百銭ならば、その五百銭を以って一人の使用人を買うことができた。また十万の銭を入れるならば、一石の米は五千銭に釣り合うだろう。この時五百の銭では、わずかに数十日分しか一人の人間を雇うことができない。しかし、最初の五百銭の場合と、後の五千銭の場合では、数は十倍だけれども、用役に異なることはない。たとえさらに千万億に銭を増やしても、一島が産出するところの米粟・布帛は多くはならない。米粟・布帛は多くはならず、ただ金銀だけが増加し、その金銀で買えるものは多くも少なくもならないが、金銀が多ければ多いほど、煩しさを増して、金銀が多いために、遊手^{viii}を増やし、天地より生じる財を無駄に消費する者が次第に現われるようになった。わが国も昔は、貨幣がなくてもやっていけた。和銅の頃、大宰府や播磨から、始めて銅銭が天皇に献じられ、これを人々に配布し、人々が交換につかっていた時は、穀物六升について一文であったという。蝦夷などは、現在においてもその土地の産出物に対して、米粟、煙草、酒とかえて銭を用いない。

これらの理由から金銀が多いと物価は上昇し、金銀が少ないと物価は低下する。物価が低下するのは、金銀の価値が上昇しているからである。物価が上昇するのは、金銀の価値が低下しているからである。職人たちの作るものを見ると、古代の物は精巧にして、今の

物は粗悪である。これは以前よりも広く使われるようになったためでもあるが、過半の理由は、金銀の価値が低くて、物価が上がっていることに係わる。漢の初期、自由に銭を鑄造させたが、そのとき米は一石五千銭に至った。漢の一石というのは、今の京都の升では、だいたい一斗ほどである。その後、貨幣の発行をおさえて、順々に人々を農村にかえし、趙過などという人物が現われて、農業の道を教え、耕作をすすめ、代田^{ix}を回復して、後には一石の価格は五銭に至った^x。天下の動きを司さどることを^{けんべい}権柄という。権とは^{はかり おもり}秤の錘である。柄とはその錘を自在にうまく釣り合すことである。いま秤は持っているけれども、掛けるものの軽重によって錘を自由にすることができないならば、釣り合いをどう保てばいいだろうか。錘は重すぎてもいかず、軽すぎてもいかず、軽いならば錘を軽くし、重ければ錘を重くし、釣り合いをつけて平衡に保つ。もし権柄を操る人が、米粟布帛、百の生活用具などの費用と支出する金銀との釣り合いを見て、多少そのコツがわかれば、増減に従って水平に保つことができる。このために、錘をかえることが権柄ではなく、軽重に従って釣り合いをとる事をいう。これを「権柄を執る」という。そうであれば、金銀の多少は、強いて治政者の憂慮することではない。ただ、金銀の用役が何かを考えればよい。米粟布帛、さまざまな生活用具、庸役の便益は何なのかを考察すれば、金銀が盛に使用されることの有益無益を知ることになろう。今日、金銀の通用を好むことは、日本だけでなく、万国同じである。万国が同じく金銀を好むといっても、金銀が多いことは、わが国の場合は稀なケースである。その証拠には、船舶で長崎で交易するものは、価格はたいそう廉価である。商人の手に入り売買するとき、日本製の価格と比較すると、海外産の価格は廉価なのを知るのであろう。金銀が少なければ、少ないのに釣り合い、多ければ多いだけの釣り合いになるものである。国家の始めは、米価は一石二斗から一石六斗が金一両に該当していた時は、諸物の価格も廉価であり、武士や庶民が苦しむこともなかった。元禄十二(一六九九)年八月十五日の大風によって、一両でわずか七斗しか買うことができなかった。これより年が経っても米の価格は安くならず、工商を営む者は、食にこまることになり、都では餓死する者が多かった。これは徳川綱吉将軍が在職中のことであらせられた。それより綱吉将軍の世が終わり、徳川家宣が将軍職につかれ、正徳元(一七一)年の秋、米価がやや下落して、壬辰(一七一二)の春になって、米価は九斗が一両であった。徳川家継将軍の時代に、金銀改鑄の沙汰があった。徳川吉宗将軍の代に、西国の苗がすべて腐ってしまう事態に遭遇し、享保辛丑の夏には、一両でわずかに米穀六斗余りしか買うことができなかった。元禄の頃、穀物の販売価格がにわか騰貴したときには餓死する人が多かったけれども、二十数年間米価の高いのに慣れたので、人々の生活もこの事態に折り合って、これがあたりまえになった。元禄以前では、米価が低くて、武士や庶民は苦しまなかった。元禄の始めに、米価が上昇して、武士は利益を得、工商は飢えた。以来、米価は以前として

同じ水準だが、工商は苦しまず、武士が飢えている。もし今日の米価を、元禄の頃に戻せば、武士は手足を地におくこともできないほど働き苦しんだろう。これが価格に適合して生活するという事と適合できないで生活するという事の間であって、権柄が必要になるのはこのような時であろう。

これは太宰春台の『経済録』による江戸の米価の記述である。また伊藤東涯の『盍簪録』^{こうしん}を読むと、まず元明天皇がはじめて人々に貨幣による取引の方法を教えられた和銅三年(七一〇)の詔勅を引用して次のようにいっている。「諸国の地は山河が峻厳に互いを分け隔て、賦役を課されたものたちは久しく労働に苦しんでいる。一袋の銭を持参すべし」。この時、銭は価値があり、銀は価値がなかった。二十文で銀一銭に相当した。

新しい銀貨が出て銭八十文で銀一銭と交換した。ところが正徳の時には、玄米二百銭といっても、四貫文であった。油が九銭といっても百八十文であった。今から観れば、まさにこのように廉価な物であったといえるではないか。いまの文字銀が、元文元(一七三六)年に発行された時、十五貫目を以て、享保銀十貫目を収納したので、銭五十文前後を、銀一銭で両替した。しかし今日、三つの貨幣はますます悪化し、金貨は金色を失い、銀貨は白銀の色を失ない、新鑄の鉄黄銭を用いている。もし強く打てば砕けてしまう。物価は年々上昇する。貧しい人にとってはその物価上昇の止る所がわからない。

安永壬寅(一七二二年)十月に追記しておく。この書を著している時には、なお銀が銭六、七十文に相当した。いまはすでに百文を上回っている。そうして米価は京都、大阪では百文になったと伝え聞く。春が来れば、さらに値上がりするだろう。

金玉は土や石の中の精英であって、得難く^{がた}朽ち難い。このため金は少量で大量なものとかえることができ、米粟布帛、諸財が足りないところを融通することができる。農業の神は日中市を開き、天下の民に周知し、天下の財貨を集め、人々は取引した後に市から帰る。各々が取引する所を得て財貨が流通したといわれていて^{xi}、その由来はとても昔のことである。そして諸財がよく流通する所は、金銀の流通していないところであり、金銀のよく流通する所は、諸財のよく流通しない所がある。このため、諸財は数がかさむ。運送が甚だ難しい。金銀が利用される所は、九州の米粟を舟や荷車によらずに、関東にいながら金銀で購入して炊くことができる。北陸の布帛を、牛馬を使うことなく、南海でも用いることができる。このために、旅行する人は万里を食料を持参せず、路銀さえあれば車馬に食料をつまないでもその用を足すことができる。

諸財は、便利が悪くて、米は衣料とすることは難しく、衣料は薪とすることは難い。金銀銅銭は、小物は分けて使用することができ、大物は金額を集めて購入することが自在であることに比べようもない。このことが天下が貨幣の利用に向う理由である。ところで金銀銅の三つの貨幣は、金は大きい金額の物に用いて小額の物に用いることが難しく、銭は小額の物の購入に便利で、多額のもの購入には便利ではなく、銀は中間であって、三つの貨幣は代るがわるその用途をつとめることができる。昔は人の性格も素朴であって、金は砂金が、銀は炭吹様のものが多く流通した。天正の頃から、大判・小判・丁銀などに始まって、慶長四(一五九九)年に始めて一分判が出来て、慶長六(一六〇一)年の後、大判・小判・一分判・丁銀・豆板などに改められた。これらは国家の造幣であって、以来元禄、享保、元文、近時に到るまで三つの貨幣は色々な種類のものが作られた。金銀は貨幣の用途を主とした。人々が器などに使うのは鉄を主にした。そして銅は貨幣や器両方に用いられた。金銀がもし貨幣の用途で用いられなければ、刀の縁頭、仏頭の装飾、漆匠の描金などの玩物にすぎない。薬用にも用いるが、重要な薬ではない。そして近頃は、使用の範囲が広がって、以前と同じように金銀を供給することができない。そのため楮鈔^{ふだ}が大きい世につかわれている。金銀が用いられるのは、ただ諸財の交換の手段でしかないので、楮鈔でも飛銭でもすますことができる。他の財では、寒さをしのぐことは布帛でなければできない。飢えをいやすことは、米や粟でなければできず、金銀の本来の真価を知るべきである。このために天下の権力を執って、経済に関心を向ける人は、有用な財貨を日々生産し、無用な財貨は貴ばないように心がけるべきである。金銀をもって天下が豊かであるか貧しいかに気をつかう人は、天下のあり方を変えるような大業をなすことは難しい。『大学』に財を生み出す大道を「農産物を作る者が多く、これを食する者が少なく、これを作る者が精励し、官職にあるものが慎重であれば、国家の財の利用は満足するものになる」と書いている。すなわちこれは大禹謨篇にいう利用の工夫である。治政者は常にこの言葉を体現すれば、天下はまさに手の内にある。しかし今の世では、何の用にもならない金銀を、何ものにもかえられない至宝と誤ってしまい、上のものも下のものも、寝てもおきても、金銀をあつめる工夫の外に関心事がない。人は四民とって、士農工商の四つの身分しかないのが普通である。武士は、上の人につかえ、下の者に教え、礼義を道とし、政刑を権力として、五穀の神を守り、国土を安泰に保つ者である。農民は黍、稲、桑、麻を作って、自らと他人を養い、筋力を使って庸役につとめ、余剰生産物ができれば、それで工商と交易する者である。職人は、世の中には色々な生活用具がなくては不便なために、朝夕その道に精進し、百の器物をつくり出し、人々の用が不自由にならないようにする者である。商人は、農民のつくった米、麦、布帛、職人の作った百の生活用具が、一方で余り他方では足らず、こちらにあるが向こうではないというようなことがおきないように通用させて天

下の利用の便をはかる者である。この四つの者は、いずれも欠けては、天下の用を果たすことはむずかしい。このために人たる者は、士農工商の本業にもとづいて、各職分に務めて怠けずに、敬んで天に仕えんとするべきである。この士農工商以外に遊んでくらし、人々の用を果たさず、天下の物財を消費するものを遊民とって、これは国家の寄生虫である。このために金銀は、四民ともになくはならぬ必要物だが、もっぱら交易に役立つものである。金銀は交換手段とすることが必要である。源頼朝が首都を鎌倉に移してから、足利、織田、豊臣と引きつがれたが、ただ馬上から天下を治めようと欲して、人々をきちんとした道に歩ますことなく、本当の太平ということがなかったが、徳川の世になって徳が妖気を消し、治政は封建にならい、百六十年来、四海に波がたたず、われわれ小人に至るまで、ゆったりとした気持ちで、早く寝て陽が昇ってから食事することができるのも、どこにこの(徳川家の)思が及ばないところがあるろうか。

徳川の初め、藤堂高虎が足利の先轍を鑑みて、自ら夫人と嫡子を江戸の都の邸に入れられてから、諸侯もおくれることなく、自分は各々の領地に身をおき、家は江戸に置いた。一年ごとに朝覲の礼(参勤交代)があつて、群雄割拠の虎視眈々とした状況がかわつて、四海が一つの家になり、一戸をとどさない親密な世の中になった。このため、今日の諸侯の費用は参勤交代にかかるものが主となった。次に公事諸役の事がある。だが、主従の盟約という統制された関係のあるところでは、これを戦争の災難に比べれば、まことにささいなことにはすぎない。慎んで財物を節約すれば、自分の領地での用途は必ず足る道があるだろう。人びとは長い間太平の生活にしたしみ、安楽に慣れきつてしまい、奉公や人生を養うやり方は日を追って華美に走った。このために、飲食は人生を養う用途ではなくなり、遠味珍品、享熟の道、調和の品などに一日中没頭するのである。衣服は寒暑をしのぐための用途ではなくなり、巧を競い奇を衒い、何ヵ月もかけて一端の帛に刺繍を施し、多くの時間をかけて一匹の錦を織出す。心をくつろぎ楽しむことのできる住居、身のまわりの調度品に豪華な彫琢を加えて、財を生産する道に日々疎くなり、巧緻な品に費すことが年々多くなる。こうなると、人びとは巧緻な品々に費す道を日々追い求めて、金銀を交換手段に用いる工夫が巧みになっていく。博奕や富くじなどというものを興行して、資産をもつ者は蓄財してその利息をとり、資産をもたないものは非常に努力して、東奔西走して、天地が生みだす財をただ飲み食いつぶし、一日を終え一年を終える。ついには、囲碁、将棋、俳諧のようなものまでも、賭になりさがり、殺風景であることはなはだしい。

したがって、金銀の用途が貴ければ、その力も大きい。金銀の力が大きければ、人は可能ながぎりこれを貯える。貯える者が多くなれば、他方で乏しくなる者も多くなる。だから、いまの時代に債務が多く困窮しているものがあることは、金銀が多く流通していることによる。金銀は無情なものだから、人を苦しめるようなことはない。ただその正しい使

い道を失えば、権柄は一方向に傾いてしまう。ああ、昔は天下国家を有することこそが、富貴であるといわれたものを。しかし今の治政者は素封家に媚をうり、陶朱や猗頓のような輩^{xiii}が、斉や魯のような国を見ても、自分の家の出納のように思うほどに、身分の高い者は貧しく、身分の低い者は富んでいて、富んだ者と身分の高い者との間は胡越の間ほど隔っている。これをみても、今やまず金銀の窮しているのは諸侯である。廉恥(欲がなく恥をしっている態度)の風習を導こうと欲しても、倉庫が満ちてから礼節を知る人々なので、どうして彼らを導くことができるか。金銀はすでに多く流通し、費用はすでにいろんな所でかかる。負債が多くなるわけである。昔から今を見ると、金銀は現在が一番使われている。したがって金銀に困窮するのも、いまほどのことはどの時代にもなかった。そのため、人々は顔を合わせば、ただ金銀がないのを語りあう。世の中一般がそうである。世の中の人すべてが金銀がないと語るならば、金銀はどこに隠れているのか。ためしに今金銀がある所を探し求めると、諸侯の国からして、土農工ともに金を貯えていない。だから商人が金銀をもっていることになる。商人はすべて同じではないが、商人以外に巨万の富をもつことができる者はいない。商人がすでに富を有しているのであれば、世の中を支配する権力は、なかばその手中にある。蘇秦や張儀のような人たちは、会計の道をもって、六国の宰相になった^{xiv}。彼らと同じように、商人は身分の上の者の前では身を畏んで慎んでいても、心は実に膨大な広がりをもつ国を呑んでいる。商人の心は農工を奴隷のように見ている。しかも農工を見て奴隷のように思うだけでなく、他方で農工の方もまた商人を主君のように仰ぎ観る。このために、四民はただ金銀を追い求めて、これに走ること水が低きに流れるようなものである。現在は太平の世なので、兵馬の功は役立つようなものではなく、世の中は平安なので、法律を起草する機会はなく、生活の困難を救う庸役の方が、文武の徳にまさっているために、金銀だけに富む人は、無芸無能であっても、不礼不徳であっても、身分の上下の者に羨望されるので、そのような世では最も広めにくいのは廉恥の風習である。そのため、金銀を借りるものは、毎年利息を払い、これを借す者は年々利息をうけとる。

金銀を貸せば金銀は世間に散るようであるが、実際には本銭を囷にして、天下の金銀を商人は収奪している。富家の得る利息が年をおうごとに増加すれば、国家の用は年をおうごとに乏しくなる。乏しくなれば、上の人下の人に税を求めざるをえない。上の人下の人に求めれば、下の人上の人に与える。豊臣太閤以来、租税の法は、三分の二は地頭がとり、三分の一は耕民がとる。昔は戦時でさえ、これで事足りていた。今は江戸初期に比べれば、人が多く田野も開拓されている。租税はどの国もみんな昔より多い。しかし費用が昔よりも上回っているため、さまざまなきびしい税のとりたてがはじまった。税の取立てが厳しくなって、これを受けるのは農民である。農業はもともときびしい仕事である。こ

れに加えていくつもの税の取立てがある。しまいには生計を全うすることができず、民は本務をすてて、工商庸役などあまたの技術をつかい、水に走り山に分け入り、百計して財を求めた。すでにいろんな仕事をしているので、本業である農業を怠らないですますことはできない。深く耕作して手厚く栽培しようと望んでもできえない。肥えていた土地はやせ、広がった農地は狭くなり、ついには本業を離れて、流亡して遊民となってしまう者は数えることもできない。いま、水に走り山に分け入って百計して財を求めても、このようなことがいささかでも飢えと渴きを救うものでもないので、半分の財を諸侯の家にするものである。諸侯もこの財を受けて自ら納めるようにみえるけれども、これも借金を償うためなので、その実際は諸侯の家も農工も、富家の役に立っているにしかすぎない。戦国の頃は、日夜鬭争がやむことがなかったので、手を拱ねいて人に命を与えることもなかったので、人は防衛を主として、僧侶も俗人も、農民も商人もその実態は武士であった。今は太平の世の中なので、苦しむことはただ金銀のことであって、身分の上の者も下の者もすべて、金銀のことをひたすら心配している。これをみてもその形はさまざまだが、心はいずれも乾没^{xv}におかれている。得と損を重視する理が勢いをますことは、誠にいかんともすることができない。いま天下の実勢についてどこに尋ねてみても、郡県^{xvi}の住民は年々減少し、都会の住民は年々に増加するわけである。これが衡平を考える人の最も眼をやるべきところである。

天下国家を有する人にとっての豊饒というのは、まったく金銀ではない。金銀を保有して豊饒と考えるのは、商売についてである。いまは身分の上下を問わず利益を求めて、非常にわずかな物事を争うように、考え違っている人は、政治を行う人であっても、商売の方法をもって国を治めようとする人である。乾没と経済は、同じように利を求めることである。その区別は、商売は利をもって利とする。経済は、義をもって利とすることにある。その昔、鄒の穆公が雁の類を飼育していたが、粟を用いて飼っていたのではなく、常^{いな}に糶^{xvii}を用いていたが、たまたまこの糶がなくなった^{xviii}。役人がこれを民人に求めたが、民は糶一石をもって、粟二石と交換しようといった。役人はこれを損であると思い、粟をもって鳥を飼うことを穆公に請願した。穆公はこの願いをきかなかつた。穆公は次のようにいった。

「粟を百姓が自分の手を煩わして耕し、背中を陽に曝して雑草をとりはらったのは、鳥獣のためにしたことであつたらうか。粟や米は民人の上級の食べ物である。どうして鳥に与えることができようか。お前は小さな器量で考えてしまい、物事を大きくとらえていない。周の諺にも「囊貯中に漏る」^{xix}とっている。そもそも君主は民の父母である。倉の粟をとって民の手に移した。民の手にあつてもわが粟である。鳥がもし鄒の糶を食べれば、これもわが糶を食べるのである。どうして鄒の粟を損なうことがあろうか」といった。このこ

とがあつてから上より下の身分に至るまで、君主のことを思うようになり、鄒では上下一体の思いをすることになった。国家を有する人は、国家をひとつの体と見る時には、民であると君主であるとの区別はない。商売は人が持っていることを損とし、自ら持っていることを得とする。君主がその民と自らを区別すれば、民の物を自らが得ることで得と考え、民の手に渡ることを損とってしまう。こう考えてしまうのでいろいろな計画をはかつて徴税を行うのだ。『詩経』に「彼方には棄てられた木の束があり、ここには棄てられた落穂がある これらはみな寡婦の利である」とある^{xx}。政治を執り行って利益を人々に提供し、民を一視同仁にみるならば、人に君たる者の利がある。用地をすみからすみまで耕せば、本当に水難がおこることが多い。貨幣を鑄造するのに雑物を入れると盗鑄が多くなる。凶作の年には庶民は飢え寒さに凍てつき、大いに国庫の食糧を消費してしまい、民は疲弊し、また急に農業に力を尽くすことができない。孝悌に民を誘い、礼讓に勤める暇もないので、身分の上の者には内輪争いが多くなり、身分の下の方には訴訟がしばしばおこり、財を消費し人を損ねてしまう。これは国家を治める者が、貧しい民の利をもって利となし、民と利を争うことの弊害である。これが治国者の利が商売の利と同じではない理由である。

いま書いた理由から国庫の財を消費して、国の風俗を正しくし、農業を勧めて工業の利益をはかり、財貨を国の人々に積ますようにするべきである。これらのことを無駄なこととみて勘定に入れて、元にあわないことを損とすること、これを市井の心という。

つまり財政をうまく行う大道とは、財を生み出す者を多くすることであり、これは天下の財が日々生み出され、民衆の生活の利便をなすということである。その品は米穀魚塩を始めとして、麻綿竹木の類から、工人のつくり出す物までである。権力をもつ人は、物事の軽重がその人の手に従っていることを悟るべきである。むかし乱世武猛の風俗も、今は太平遊惰の民となっている。これに基づいて考えれば、たとえ今の錘が金銀に帰していても、大いなる権力を行使して平衡を得させるならば、その錘は重心をついには移し、人々は儉約勤労に帰り、廉恥礼讓の風習がおこるのも、どうして難しいことだろうか。軽重に従って権柄を移す人は、その病根をしっている。もし基本にもとづかず、ただ金銀を増減して、その平衡を保とうとするならば、このように重いのをみて、錘を重くし、軽いのをみて錘を軽くするやり方であつて、無策というべきである。宋の頃、錢貨がひたすらに増加するにつれて、錢貨は小さく軽くなってしまい、緹環錢といって糸を通し水に入れると、糸にひかれて沈まない程度に軽くなってしまい、物価はしきりに高くなり、しまいには一斗の米価が一万錢になってしまったとき。近年では錢は鉄となり、銀は札となるほどに、物価が騰貴するのは、緹環錢と同じ意味であつて、平衡が傾いたためである。もしその権柄を正さないでその物価の高低に従ってしまうと、金銀はますます多くなり、富者はますます金を貯え、貧者はますます負債を重ねる。質の悪い貨幣が世間に盛んに広まるならば、

精巧な金はみんな姿を隠す。そして富者をみれば、大きい財をもつ者は巨万を貯え、小規模な者はいくばくかの金を貯え、小規模な富者は義金の家を借り、大家は巨万の家を借りる。借りる者は元金を払い、貸す者は利息とともにうけとる。貧しい民の数金、豊かな民の数万金も、そのあり方は等しく、ともに富家のために金銀を借りる者である。草むらには雀が集まり、川の淵には魚が集まるのに似ている。草むらに雀が集まるのは鷹が襲ってくるからである。川の淵に魚が集まるのは、かわうそが川の瀬から魚をとろうとするからである。川の淵や草むらは魚や雀を集めないけれども、鷹とかわうそが魚と雀を好むために、かえって川の淵や草むらに集まるのである。金銀もこれと同じで、富家の力によっては、なかなか集めることはできない。負債をもつ家がこれを借りるから巨万に至るのである。そもそも、負債のある家はなんで借金をするかというと、その年の収入が足りないからである。年の収入が足りないのは、奢侈や賄賂が昔の倍になってしまい、制度がいまだに成り立っていないからである。節儉の道が行われていないからである。だから神君徳川家康公が三河におられた頃には、知行をとる人が結婚するときには、負木^{xxi}というものがあって、新婦には被をかぶせて負木に腰かけさせて迎え入れたものである。そして、慶長十一年丙午(一六〇六年)に、江戸城の修造が終り、次第に人民が集まり、繁栄しはじめたけれども、駕籠というものは武家が願い出て用いるものであって、町家が用いるものではなかった。橋本甚三郎というものは、お上の御用を引きうける大家であって、深入りという後髪を剃っていた。甚三郎は珍しいことに渋張りの竹駕籠に乗ることを許されたが、不案内だったので、下乗場を乗りこしてしまい、目附に質され、難儀に及んでいるのを、朽木民部ノ小輔殿が見かけて

橋本に、下るべき物が、

のり物で、深入をして、咎められけり

と戯れに挨拶して事なきをえたという。この事もこのような類例がなかったので、かかる過ちがあったのである。中国も日本も、昔は馬であったが、いつしか乗物が盛んになり、今は下々の者まで用いる様になった。馬は人が乗るものであって、人は人の乗るものではないと、古代の人はこれを恐れた。心ある人は慎むべきことである。この頃は、三味線などというものは、男子はもとより、武士や商人の婦女子に至っても、自ら奏でることはなかったという。何事も徳川の世の始めもこれと同じで、財や用役の費用もこのようになかったのであろう。いまは諸侯の家も、節儉の令がないところはないであろう。ただ滔々と流れる時の勢いはかえることが難しく、かつ経済に掣肘^{せいちゆう}が多く、あるいは任務にかなう人がおらず、任命された人がその才能を伸ばすことができないでいるからである。こういうわけで、君主はよく人を見る眼を重んじている。よくその人を目ききして抜擢して任命したからには、その人物のすべての才能をいかすようにすべきである。掣肘とは、人

に物を書かせて、後ろからその肘を引くことである。どのように書かうまいものでも、後ろから肘をたびたび引かれては、書くたびに書き損じてしまう。書き損じられて、その過ちを怒られることは、筆を執る人の難渋することである。このようなわけで、人の主たるものは人を得るのに苦勞して、政治をするにうまくいかないのである。人を得ることと人を使うことがまったく難しいので、廉恥の風習が荒めば、人は賄賂を好むようになる。礼讓の教えが至らないので、人は争奪を好むようになる。制度が立つことがないので、派手なくらしぶりとはどまることを知らない。いま、人の好みにまかせ、とどまらないことをとどまらないままにさせ、限りなき人の欲を限りある財貨で償うことを求めようとすれば、天下の大山高岳に、すべて金を産出させても、米粟布帛の至宝を生み出す者に対しても、その仕事をすてさせてしまう。そして衣料品・食料品・生活用具などにもならないものに、人はむだな費用をかけてしまうにすぎない。このようなわけで、今はたとえ金銀をもって、天下の米粟布帛のように多いといっても、世間ではただ負債の数が多くなるだけで、至宝の生産の行いは日々に少なくなり、人の賑うことはなくなってしまうだろう。ただし、このように傾いた世の勢いに対処するには、金を持っているほどよいことはない。金を持つには、乾没にかなうやり方はない。このために今の富んだ人は、十に九は商人である。残りの一つも外面は商人でないようであっても、その実態はみんなわざと商人にはみえない貧しい見かけになるようにつとめているのである。商人に次いで世渡りがしやすいのは、遊手である。士農工は貧しいもので、利益を求め、害をみては避けるのは、天下の常態である。それゆえ今の士農は、本業を厭ってしまい、十に二三は工商に移り、十に三四は遊手^{xvii}に移る。移れば、前よりも生活をしやすいので、日々年々、農業を去る人の勢いはやまない。農業が減じれば財も減じる。財が減じれば国家の根本も弱体化する。これが郡県〔地方〕の人口が年ごとに減少し、都会の人々が日々増加する理由である。私が見聞する所でも、この近辺であっても、七八十年前は、京都大阪の辺から子女をつれて帰り、家で使用していることが最近までも多かった。いまその子孫がいく人もいる。今はただ京都や大阪に行くことばかりになって、こちらにつれてくることはない。ささいなことであるが、時勢の変わりようをみることができよう。

財貨を思い通りにする権力が、すでに商人に属するので、米粟布帛魚塩など百品が、生産されるやいなや、すべて都会の地に向って輸出される。輸出されたあとは、貧家は初めから衣食に不足し、豊かな農家はその年に必要な衣食を手もとに留めてそのほかは売るだけで、農家の余計な分はまったくないのである。輸出している先の都会は、財宝が全国より集まってくるので、諸財貨は常に余計に貯えがあり、それを売ることをやめれば、国郡は食料に不足する。買い入れを拒まれると、郡県は金銀を手に入れる所がなくなる。郡県は自分でまかなえない需要がある時には、すべてこれを都会に頼る。都会はまたこれを巨

商に頼る。郡県はすでに財宝に余分はないので、貧民はすべて本業を捨てて金銀を得ようとする。金銀を得て穀物が郡県に返ってくる時には、価格は以前よりも高く、量は前よりも減じている。これに財宝の輸送の費用がどれだけかかるだろうか。都会はこのように財宝に富んだ地である。遊手たちが日夜集まりつどい、美しい着物を着て身を飾り立て、宴席で唄の技巧を競い、人の目を奪い心をうつつにさせることに巧みで、良民が力を尽くして生産したものを消費し、人の財布から金を釣り出すのである。このようにして釣るものも釣られるものと同じように、民衆が血の出る思いをして作りだしたものを貪り費やすのである。であるから金があれば出来ないことはないと言金悦びとする心は、われら小人が自分の身だけを安ずる計りごとでしかなく、天下国家を有する人の悦びとすることではない。金銀の通用は、天地の観点からみれば、左のものを右に移し、右のものを左に移すにすぎない。昨日までになかったものが今日は天地の間に現れて、天然自然の創造を助け、飢え渴きをいやし、寒暑を防ぐといった布粟や生活用具の功にどうして匹敵しようか。そうであれば、この至宝を少しでも天地の間に生み出し、少しでも天地の間にあらしめ、民の生活の用に役立つほど、天の理にかなう務めはない。ただ世の勢いは偏っていて、郡県に来たる年の飢饉の備えがなく、都会では遊手が貪り費すといったわざわいがあるので、このような事態に心を傷む人に乏しい。

それゆえ、民衆が風雨に吹きさらされ、夜中まで畑を耕し夜露に濡れながら収穫した血と汗の結晶を、美しい着物で身を飾るとか、宴席での唄色を競うために貪り尽し、この至宝を生み出す者に儉約させ、至宝を消費する者にいっそうの消費を促す。心ある者はこのような事態に注意を傾け憂うことがないわけがない。もしこの事態を憂う人がいるならば、一郡一県を治めるにも、何とかして一人だけでも農業に戻っていく道を開き、生活必需品を他国に求めないようにすることこそ肝要である。一国を治める人は、他国を洪水のはげ口とせざるをえないこともある。しかし自圭と禹王では、その権勢は同じではない^{xxiii}。さて、人々が農業に就いたり工業にはげみ、そして士族は廉恥礼讓の風習を醸成し、民衆は華美淫奔の風俗を改めれば、遊手はいつしか少なくなるだろう。これを「農産物を生産するものを多くし、これを食するものを少なくし、これを作るものが精励し、官職にあるものが慎重であれ」という^{xxiv}。すなわち利用のことである。用を利することは、その生活を豊かにするということである。『論語』に「人々を富ます」というのは、すなわち生活を豊かにするということである。いま都会が日々栄え、人の数が増えることを繁昌というけれども、郡県の人増し、都会の人増せば、本当の繁昌であるが、郡県の人が次第に減少し、都会の人だけ次第に増加してしまうのは、まことにひとつの感慨をもよおすではないか。『礼記』の王制篇で、有国の道を説いて「国に九年分の貯えがないのを不足といい、六年の貯えがないのを急(危険)といい、三年の貯えがないのは国ではない」といつている^{xxv}。

いまの世の中は、支配する権力は金銀にある。だからたとえ人は家に余分な布や余分な粟が有っても、これを貯えようとする人はいない。これは貯えない人の罪ではない。金銀の便利が他の財貨に勝っているからである。便利の点ではすでに他の財貨に勝っているのに、誰が重量があつて運搬するのに不便で、利息を生まない他の財貨を貯えるだろうか。このために民衆はこぞって他の財貨を売り、貧者は富家からの借金を返し、富者は貧者からの借り入れの申し出を待っている。われわれ一般人には、この世の中の勢いを止めることはできない。われわれ一般人の利益は、治世者の利益ではない。どうしてかというと、国中の米や粟、布帛を金銀に交換して都会に輸送する。しかしその得た金銀は、貧しい人々の手もとにありつづけないので、凶作や飢饉、そして戦さがあったときに、何をもって米や粟、布帛を手に入れることができようか。そのようなわけで今の世の中は、一年立ちというものである。一年立ちということは、一年間に生ずる地上の財を、一年で消費し尽くすことである。もし天下永安のためにこれを憂う人がいるならば、金銀をただむこうからこちらへ場所を移すことをやめて、米粟や布帛などを生み出し蓄蔵する道を考えるべきである。その年に生産されたものを空しく輸送し尽して、都会の遊手に提供することは、はなはだしく惜しむべきことである。古代の人は三年の蓄財がないのを「国にはあらず」といったものだ。しかし稲が実る時は、麦は民間では尽きてしまい、麦が熟する時は、粟は民間になくなってしまつては民衆はどのようにして苦難の年をしのぐことができようか。誠に一得一失の理ことわりであつて昔金銀が少なかった頃は、諸財貨の流通が滞つたので、これを運び尽くすことができずに、凶作や飢饉やさまざまな災害の備えもあつた。今は金銀が多く、諸財貨の流通が自由になつたので、これを都会に運び尽して、貯えていた古い穀物が新しく収穫した穀物の代りになることはない。そのため今の世で支配の権力をにぎる者は、財産をもっている家であつて米粟布帛を集めれば、上の者も下の者も財貨はことごとくなくなつてしまう。こういったわけで、みかけでは諸侯が米粟を有する者だが、実態では富商が所有して、諸侯はわずかの家臣や民衆を扶助することもできない。米粟はもともと豊富になりやすいものであつて、もし一年が豊作である時は、穀物は食料としてありあまっているものである。あまっているときに貯えれば、凶作の年に備えるだろう。もしこれを売り尽すようになってしまつると、豊作の年の翌年は、凶作の年の翌年に異なることがない。これは天下の良民が、金銀のために遊手の奴隷となつてしまうことである。布帛や米粟は諸財貨の交易の役にはあまりたたない。このことをもつて金銀の用途は広い。このことから金銀の用途は急であつて布粟の用は緩やかである。緩やかなことをおいて急であることを先にする、大勢はそうならざるをえない。このため布粟にはこと足りていても、金銀がたらぬので、布粟を貯えるのを損と見なして、足りていても足らなくても、布粟を家にとどめておかないので、金銀を比較的豊かに持っている人も、米粟を余分に持つて

いないことは他のものと同様である。用途が多ければ、金銀を借りる人は多い。借りる人が多ければ、銭神は足がなくても飛ぶ。用途が少なければ借りる人は少ない。借りる人が少なければ、銭の権力は衰えて、飛んでいく用も削減する。銭の権力が衰えれば、布粟を蓄えるだろう。布粟を蓄えることをえて、今年の豊作をもって、来年の飢饉を防ぐことができ、今年の布をもって来年の寒波を防ぐだろう。藩主はむりやり自分の国庫に蓄財していなくても、貧しいとはいいがたい。昔の戦国の頃は、下民も農業や養蚕の暇はなかったが、あちらでは籠城、こちらでは対陣というときは、それ相応の兵糧をもっていた。今は太平の世であって、わずかに参勤交代や雑役だけだが、その臣下の扶持でさえ乏しい。万が一辺地の警護もあったならば、何をもって祖先の遺志に応え、国家百年の思に報いることができよう。遠い禍いがなければ、必ず近くに憂いが生じる。藩主の急務として、なにがこれより優先するだろうか。四民はこれを藩主と仰ぎ、藩主はこれを將軍に仰ぐ。天下の趨勢は、將軍の行うことであって、藩主の力の及ぶところではない。一国の趨勢は一国を治める人の行うところであって、士民の力の及ぶところではない。よく権力を行使する人は、よく一国の勢いを維持し、勢いを維持することは、たとえば砂を盆の中に入れてゆきぶるようなものである。左にいくのも右にいくのも、すべて手の内で行うことができる。よって着飾った生活に走らすのも、質素に走らすのも、利に赴むかすのも、義に赴かすのも、金銀を貴くするのも、布粟を貴くするのも、良民を多くするのも、遊手を多くするのも、権力をもつ人の意のままである。天下一年立の趨勢は、藩主が変えることはできないが、一国の趨勢がその国の藩主が変えられないことがあるだろうか。その治政の方法は米粟布帛を生産する者を多くし、これを消費する者を少なくし、これを生産することに精励し、官職にあるものが慎重になることである。今は天下太平であって、恩沢は天のようであって、どうしてこんなに安楽に暮らせるのかと思ひ回らすこともなく、身分の貴い者も賤しい者も、衣服飲食や住居交際が毎日のように華やかになり、要職にある者も俸禄のほかに賄賂をもらって生活を行っているので、田地の租税も重くならないわけではない。臣下の俸粟も減らさざるをえない。このため農民に余分の利益を与えて、人を農業に帰し、工業に力を与えて、遊手を働かせ自活させ、財貨が他国に出ていかないようにと思うのである。もしその病根を見ないで、枝葉末節をみて、布告を下して賄賂を禁じて、奢侈をやめさせようと望んでも、礼樂を講ずることなければ、制度は立たない。民衆の必要とする品が足りないことを求めても、網を結ばないで魚を羨む類と同じである。まず大勢を治めるには、全体の物事のあり方を知るべきである。十人が耕したものを一人で食べ尽し、十人が織ったものを一人で着尽してしまえば、九人は飢え寒さを免れることはできない。それゆえに一人の男が耕作してその妻子を養い、一人の女性が蚕を飼って織り物をつくり、夫や子に着物を与えるべきである。飲食がこれより美食でありすぎ、衣服がこれより麗しす

ぎれば、その本人には余りがあっても、天下にはそれらのものが足りなくなるだろう。権力をもった人は、庶民と同じようにするべきではないだろうが、貧しい人のために慮かって、これらのことを察するべきではなかろうか。美食は金銭をたいそう使うのでなければ、饗応に供するには不足する。美しい服は数ヶ月の労働を用いないでは、一着も作ることはできない。もし庶民の風俗が自然とこの範囲外になれば、争いか飢えや寒さを免れることはできない。民衆を治める道は、赤ん坊を育てるようなものだという。主君は父母であり、民はすなわち子供である。子は甘いものを食べ過ぎて病にかかってしまうのも、泥土や雨露で衣服がいたむのも知らずに、有るにまかせて使用してしまう者である。民も子供と同じで、少し耕作して余りがあれば、様々なことに使おうと思いをめぐらして、僧侶や巫女は縁起を募り、遊妓の輩は暇をうかがい、職人は凝った仕事をし、国が富むことに心をやる人はいない。このためどれほど仁政を行っても、湯を雪にふりそそぐがごとく、財貨は人の手元にとどまるものではない。そのために子供の身のために甘いものを食べて病気になるのを予防し、雨露や泥土に衣服が濡れないように、節制を加えないでいると、米粟布帛を給する者は暇もなく働き、それを用いる者が災をひきおこすということである。災いを身に受けるとはいえ、節制を加えてしまうと今度は、父母を怨み泣き叫んでしまう。貧乏な民は自分のことしか考えないので世の中の大勢を見ない者なので、あるいは自分に都合が悪かったり、あるいは情欲がみたされないと、幼児が父母を怨むように、とやかく興奮して人の心を動揺させる者である。小さな利益を求めて、大きな利益を害するものである。このとき英断の主君でなければ、その臣下は任につくことはできない。剛毅な臣下でなければ、その業をなす事はできない。このことをもってしても、政に制度を立てることは甚だ重要であって鳥肌がたったり目をそらしたりする人であっては行うことはできない。また制度に過ちがあれば、物を害することが限りなくなってしまうので、かりそめにも立ちやすいことではない。鄭の子産が政を行ったときに「都市と地方における生活のあり方の上下の区別を定め、身分の上下によるサービスの別をつくり、田地には境界をはっきりさせ、農家には組合をつくって相互に扶助させた。身分の高い人で忠実に儉約する人には、これによって賞を与えて驕慢奢侈の者にはこれによって亡きものにした」。人々は「われわれの衣服や冠を取ってこれをしまいこませ、われわれの田畑を取って組合をつくらせた。だれか子産を殺さないか。わたしはその者に協力しよう」と歌ったが、三年を経過するとすべての人が「われわれに子弟がいる。子産はこれに教育をした。われわれには田畑がある。子産はこれを増やした。子産が死んでしまえば誰がその業を継ぐというのか」と歌った^{xxvi}。

子産が死んだ時には人々はみんな慈母を失ったように思った。目上の人の前では人よき人と思われようとはかる人は、非凡の功を立てることができない者である。非凡の功を立てる者は非凡の才能を身近に招き、非凡の才を知る人は非凡の君主である。君主が才能

のある者を登用するとき、賞める者が半分、そしる者が半分、利もまた半分、不利もまた半分である。主君は見識が明らかで決断が果敢でなければ、事態をかき乱し人を傷つけるだけである。そのため古代から主君と臣下の価値ある出会いは大変難しいということは理由のないことではない。ゆえに制度を立てなければ仁恵も無益である。生産したものが自らを養うに足らず、あるいは余計に売りさばいたり買い入れたりする流通の経路があるならば、余剰や不足が共になくなることは近いだろう。『礼記』王制篇に「収入を見積もってから費用を定めよう」とあるのは、上は王侯や上級の官職者から下は使用人・草刈人に至るまで経済生活の要諦をなす言葉だと肝に命じるべきである。

さて、天下一年の余計な布粟は、すべて富商に渡り、富商はこれを都会に輸出する。ここにおいて郡県は欠乏してしまう。凶作飢饉の時は、まったく都会に布粟を求める。都会に欠乏の変事があれば、郡県に供給する所はないだろう。都会で物を蓄蔵するのは、常平倉ではないので、郡県に供給するためではなく、結局遊手たちを養うためのものである。そのため、郡県は布粟に余分はなく、都会が蓄積したものには木くい虫がいて、穀物は満ちやすく減りやすい。一年豊作であれば、天下に穀物を満ちる。一年不作であれば、郡県の穀物は尽きる。穀物が満ちれば人々は食糧が乏しくないで、各々が職に就いて本業に戻ろうということと思う。穀物が尽きれば食糧を仰ぐところがないので、強壯な者は庸役で食べていき、体の弱い者は乞食となって食べていく。本業を捨てて余業で食べていくのは、時勢のやむをえざることで、人々の本心ではない。そのため豊作の年になれば、遠客が帰りの舟にあったように余業を捨てて本業に戻ろうとするので、庸役する者はまれになり、余業をする者は怠けるようになる。このときに庸役の労賃は騰貴する。しかし反対に一年穀物の実りが豊かでなければ、雨後の洪水がたちまちかれるがごとく、また本業をすてて余業に走る。この場合に庸役の労賃は低くなる。これは実際に民衆が一年立ちに生活がなくなってしまい、定まった職業で食べることができる者がいないからである。これは人情からいつて誰が本業に戻りたい、安心な仕事に就きたいと願わない者がいるだろうか。これは郡県に凶作飢饉の備えがなく、一度は本業につき、一度は本業を離れるからである。もし本当の太平を得ようとするならば、金銀の流通利用を貴ばずに、余剰の布や余剰の粟を人々は家に蓄えるだろう。たとえ凶作の年に遭遇しても、みだりに本業を失わないだろう。本業を失わなければ、労賃に高低があったとしても、また特別のことでもない。このため国家が乏しいということは、金銀の流通利用がうまくいつているので、布粟を蓄積する人がいないことである。布粟を積む人がいないのは、金銀を借りる人が多くて、金銀の利益が布粟に倍するからである。利益が布粟の倍であり、運輸や貯蔵が布粟より便利である。たとえ厳刑を以ってこれに臨んでもこの世の勢いに当たることはできない。今の世の中の事態をみると、庸役をはじめ、その他の営みも、多くはみんなその人の本業ではない。

困苦のために金銀の必要にせまられて、やむなくしばらくここに雨やどりし、雨の晴れ間を待っている。空が少し晴れていけば、やがてまた雨が降るとしても、どうして長い間その木陰に留まっていようか。そのうちに、衣食にすこしゆとりがあれば、女子は嫁にいき、男子は本業を求め、その務めに服そうと願う。その務めに服しようと願っても、ほどなくして凶作の年がやってくると、食べるための営みのために、もとの木陰を立ち出て、さきの木陰に雨をしのいでいるといった心のありようである。人に貧富の隔てはあっても、人情の異なることがあるだろうか。すでに人情に異なることなければ、老いた親、馴れ親しんできた妻子には、朝も夜も打ち語り、親しき友達をたがいに訪ねることを願わないものがあるだろうか。そうであるから誰がその本業をすてて、余業につき、喜び楽しみを厭い労苦を好む者があるだろうか。身を売って他人の奴隷となることは世の勢いが止むことができないからである。そして世の中を平静に観る時、庸役の人は本業を求めて田舎に戻ることで、悦ばしいことはない。国を治めることをもって任とする人は、庸役の徒を本業につかすことが本懐である。今、貧民の田は富家に併合してしまい、貧家は富家の田を借りて耕しているの、富家は他人を主人にたのまないではいられない。もし陰陽の調和の手を経てこの世の行いが平衡に保たれ、米穀の禄が郡県に三年から五年も支えるほどあれば、富家は貧しい民の田を併合せず、貧しい民は本業に帰り、遊手は働く所があり、余剰労働者たちも良民に習って、余事に務める所あるならば、本業と他業を交代交代にすることをしないでいい。物価が上下動しても、だいたい定まった基準があるだろう。すべて物事には折り合いというものがある。今のならいからみれば、国内の人がすべて富めば、使用人を買うことができなくなり、庸役の人がいなくなると、かえって難儀になると思ってしまうのは、その折り合いを見ないがためである。今の貧しい民は一年は本業に走り、一年は余業に赴くために、物価は変動して定まらない。本業に人がいて、余業で働く人が励んでいけば、全国が富むことになり、人々が苦しむことがあるだろうか。古代、仁徳天皇の治政では、三年まで貢租を許可したけれども、宮廷が荒れたという噂はあったが、そのほかの支障は聞いていない。今の世の中の常識で考えると、怪しく思えるが、漢の文帝の時代、鼂錯ちようさくの計画に従って、民衆に十二年間租税を半分にし、翌年には田地の租税は除外されたが、なお大倉の粟は続々と集められてきたという。日本と漢国、そして古代と現代のちがいはあるが、土地から作物が生み出されることは依然として同じで、人の身長も縮んでおらず、お腹に容れる分量も変化しないので、陰陽の調和の手をかりれば、人々は六府の真価を覚り、九年間の水害、七年間の干魃であっても、ついに生活を支える道がないわけではない。今はただ六府を交換する手段の金銀が、主客転倒して主となり、衡平な生活のあり方が難しくなってしまう、豊作には豊作に苦しみ、凶作には凶作に苦しんでいる。仁のある人物が位についていて、どうして豊作に苦しむことがあるだろうか。秤にかけた錘が平衡を失った日は、

重たい物を秤にかければ、錘は先へすべり、軽い物をかければ、錘は後へおちてしまう。現在では、使用人や諸物の価格の高低は、ささいなこととはいえども全体に与える影響は小さくはない。国家の権力を執る人が最も心を注ぐべきことある。庸役の人の労賃が増加するとは、個別に憂うことであつて、治政者の説くことではない。なぜかという、この機会に乗じて、小民をして本業に復帰させ、富農が貧しい農民の田を併合している実情を察して、農民の労働をもつぱら耕作に向かわせ、荒地を開き、堤防を修復し、寒苦の細民に、老いた親や親しんできた妻子と団欒をもたせ、同じように太平の恩恵にあずからず機会だからである。これを説くことを憂うのは、平衡を保つのが難しいことに苦しむからである。このように人が本業に戻ることができれば、民衆の労働はもつぱら農業や養蚕に戻り、大地の力を利用し尽すことができ、大地の収穫物を生みだすことがますます多くなり、男女ともに余剰の布や余剰の粟を持つことができ、金銀を偏って重視する世の中の勢がなくなり、各自その労働に応じて金銀を貯え、その上で余暇に孝悌忠信の教えを教育すれば、人は米粟布帛の貴さを知り、金銀が交換の手段にすぎないことを知り、廉恥礼讓の風習が興るだろう。慈愛惻隱の情を養うべきである。人々が満足すれば、食べたり着たりすることのできない金銀を誰が利息を払って借りる者がいるだろうか。借りる者なければ、金銀を貯える人もまた遊手となるような産業も成り立ち難く、彼らも各々四民の本務に戻るだろう。金銀が交換手段でしかないことから観れば、金を所持する人は最も有用な人だが、自然の創造という立場から見れば、すこぶる遊手と似ている。自然の創造の働きを助けること、武士の太平を守ること、農工の物を造り出すこと、商売の有無を通ずること以外はすべて遊手である。遊手が勝れば四民の本業は疲弊する。四民の本業が疲弊すれば、国家の根本はついに弱体化する。今天下の趨勢は、末業を追って金銀の便利を知り、その利息をつみかさね、遊手となることを願い、米粟布帛を賤んで、余分な米粟布帛を家に蓄える道を知らないので、上下ともに市井の心となつて、国家久安の計を考える暇もなく、そのため、僧侶は仏を売り、巫女は神を売り、学者は道を売り、医者薬を売り、形はさまざまかわるが、心の商売に非ざるはない。ここまで長く人の心を染めた金銀なので、たとえ聖人がでてきたとしても一朝一夕に金銀を軽んじ、六府の重要を知らせるのは困難にちがいない。そうとはいえ、金銀を一切除外して治政をなせとはいわない。何とかして費用が多くなることの理由を何とか探し、借金しないとやっていけない天下の源を塞ぎ、金銀を豊富にもつ家に天下の百貨が集中することを不可能にさせて、諸侯の国が小康を得、四民がその本業を楽しむことを可能にすべきである。これは物事の衡平を保つことの要領である。金銀はもともと美しい物で、治政者は布粟金銀を国庫に満たし、下々に兼併偏重の勢い(豊かな者が貧しい者の富を併合する風潮)がなくなれば、その交換を可能にする金銀の能力は、本当に諸財貨の及ぶところではない。戦さの勝利や民間の日用の利便につかえ

るなど、治政者に欠かせないものである。金が山中にあれば土や石の中のすばらしい宝であって、獲得するのはむずかしい。美の極致、重さの極致であり、万国すべてこれを所持することを望んでいる。そのためこれを得ようとする者が、土石のように思い、下々の人が金銀を細工する労働の疲れを察することなく、身分の上の人が自然の賜り物の精英たる金銀を貪れば、治政者は国を傾け、一家の主人は家を破産させる。また各国は国境がある。国境を出たものは再び戻らないので、最も慎むべきではないだろうか。『五事略』^{xxvii}に記載されたことを考えると、長崎一ヶ所で、藩府から海外に輸出されたのは、正保五(一六四八)年から宝永五(一七〇八)年まで、六十一年間、金二百三十九万七千六百両余りであり、銀三十七万二千二百九貫余り、銅は寛文三(一六六三)年より宝永五(一七〇八)年まで三十六年間に一億一万一千百四十九万八千七百斤余り、この書にかかれた以外に実際いくらかは分かりがたい。だいたいこれの三倍が輸出され、現在日本にあるのはこの三分の一であるという。いま狡猾な商人が、自分の利益を得るために、しばしば金銀を海外へ洩らすことを疾むことはなほだしい。ああ、まったく世に害をなす者である人が金銀を使って害を与えるのである。優良な医師はとりかぶとや磁石でも病を治す。ましてや諸財運搬の能力が船よりも早く、荷車よりも速いのが金銀ではないか。それでは金銀は多ければ多いほどよいにちがいない。これを考えても平衡を保つべき人が、権柄を行うことができない時は、多ければ多いほうに傾き、少なければ少ない方に傾いて、同じように人々を苦しめる。もし権柄を行うことができるとは、多くも少なくもない平衡をえるということである。これは、六府の用がみたされ、兼併偏重の煩いがないからである。ところで世の中の費用を考えると、昔はなくてすませたもので、今はなくてはこまるものの数は知れないほどである。仏教は最も古い。天然痘なども昔はなかったという。有益無益なものを、だいたいこれを数えると、天文・地理学は西洋が精確である。でき物・切り傷の治療も次いで精密である。木綿・鉄砲・望遠鏡・自鳴鐘の類が最も重宝である。キリスト教と天然痘は最も忌むべきである。しかしキリスト教はすでに根絶した。天然痘は世に蔓延した。タバコは二百年前に、茶は千年前に日用品となった。髪油もまた昔はなかった。しかし今や太平の世になって百六十年、酒食技巧、淫靡の風習は昔の比ではない。歌舞音曲、博打など人を誤らせるもの数知れず、もし上古の質朴の世に比較すれば、民衆の生活用品の費用は半分である。このようなことを本当に恐れなくてよいことだろうか。

天文地理学はインドが最も粗雑である。中国はやや精密である。しかし思弁的傾向が強く、実測に疎い。西洋は器材に優れ、船をうまくつかい、足跡の残らない地はない。このため世界を見ること手の裏を見るに等しい。実は千年来の大愉快事である。西洋の医術は、内科を省き外科に詳しい。中国人の得意分野以外のことには詳しい。中国人の治療は、昔の人が五運六氣五臟六腑などということを用いたもので、ついにこれにとらわれて誤

り、実際の観察に時間をとらなかった。西洋人は実際の観察に意を用いた。そのため人間の臓腑筋骨もしばしば解剖して直に試した。それゆえ最も精確詳細である。しかし天地に条理があり、条理を得ないでは、観察していても、ただぼんやりしていて、なお真実に遠い。そのため天地のあり様を説明する上で、中国には木火土金水といい、インドに地水火風といい、西洋に水火土気といい、ともに伯仲した見方である。木綿は桓武天皇の頃、崑崙国の人々が持ってきたが栽培しなかった。文禄年間から広まって、民衆の生活に利益があることでは五穀につき、桑や麻よりも優れている。鉄砲は後奈良天皇の天文十二(一五四三)年八月、薩州種子島の主時堯がこれを蛮人ムラシクシャとキリシタダマウタの二人から伝え、泉州堺の橘屋又三郎という者が、精練の方法を詳しく伝え、今に広まった。豊後には、これに先立つこと二年前、天文十(一五四一)年、フランスサベイ^{xxviii}という者が来日した。この人物は西洋ポルトガルという国の出身で、後にインドで死んだ。中国の書物ではフランススとある。大砲をこの人が豊後に伝えた。初めて大砲を打ったとき、観衆はみんな腰がぐくだけで肝をつぶした。このため国崩しと名づけられた。ムラシクシャ、フランススは同一人物で、フランススの転音であると、新井白石先生は説いている。もっともな説である。さて人はこれを大友亡国の前兆といった。昔から天の川などは水精といって、ただ気の精のように思っていた。近頃、望遠鏡が渡来して、すべて星であることがわかった。思うに大地は球体であって、海水をたたえている。海中に浮かぶ大陸が二つある。一つは北方にあって東西に長い。もう一つは中央にあって南北に長い。北にある大陸を三大州とする。西はヨーロッパ、日本人はエロッパともいう。すなわち西洋である。オランダなどもこの中にある。東をアジア、中国日本インドなどもこの内である。南を南アメリカといい、北を北アメリカという。また南大洋中にメカラニカという地がある。昔、西洋の人が見つけて、これを加えて六大陸というが、何度か訪れてみると、小さな島であった。よって五大大陸とした。アメリカの地はだいたいこの国の下にあたる。北アメリカの中に、ニューイスパニア^{xxix}という国がある。これは西洋のイスパニアの名をとってこれを用いた。慶長十五年の秋、このニューイスパニアの商船が、台風のため日本に漂着した。幕府がその船を修理し、資材食糧を与え帰還させたが、慶長十七(一六一〇)年の夏、その国から使者がやってきて、感謝の意を伝えた。そのときの礼物として、自鳴鐘を献じた。これが自鳴鐘の始めである。これらの物品は、代々重宝とするものである。キリスト教は西洋の人はキリステマンといい、日本人は切支丹という。中国には明の隆慶万暦の頃、ローマの利瑪竇^{xxx}という者が明国にわたり、浙江府の中で、荒地が有ったので一学堂を作り学問や文章を教え、書物などを著述して人を欺き、ついで龐迪我^{xxxi}というものがまた来て、金銀などを与えて教えを広めた。わが国では、フランスス等が豊後でこの教えをすすめてから始まり、その流れをくむ如漏法師^{xxxii}、因果居士^{xxxiii}、無遍などという者がもつぱら

この教えを大友義鎮を宣教した。大友は深くこの教えを信じて、筑紫の神社仏閣は、このとき多くが毀廃された。このことが足利義輝に聞こえ、如漏法師を召して、織田信長にその教義を質した。信長は淀の屋敷において既の口でその実情をきき、直ちに櫂の棒でこの法師を撃殺し、その首をさらした。義鎮は大変恐れて、大徳寺から真斉和尚を招き、剃髪して休庵宗麟と号した。しかしその波紋はおさまらなかった。豊臣秀吉は民衆を惑わすことを怒り、文禄の頃、バテレン六人とバテレンの協力者二十余名を、召捕り、肥州長崎で彼らを磔にした。このことから海外からの船舶を停止しようとしたが長崎の民衆が嘆願したので、これは中止になった。しかしこのキリスト教に勧誘する者は絶えなかった。寛永十四(一六三七)年、凶徒が肥前島原に集まって、幕命を拒んだ。翌年春、凶徒たちは誅に服した。その後、キリスト教に通じる諸国の船舶の交易を許さなかった。禁を犯して死刑になった者は、この事件の前後通じて二十八万人となり、キリスト教はついに絶えた。天然痘や煙草は同じく西洋から入り今も絶えない。カルタなども西洋のものである。煙草の始めは、南アフリカの中、アロリカナという地である。その近海に十八の島がある。これをマリランアダという。その中の一島をセントヘンセント^{xxxiv}という。この島から始めて煙草がとれた。日本には、天正の初めの頃、または慶長十(一六〇五)年に渡来したともいわれる。煙草を植え始めたことは、肥前の長崎の桜の馬場で作りはじめてから広まったと、西川如見先生はいつている。酒と色は、古人の訓戒がすでにあるので、今更改めてということもない。煙草は酒のように人の心を蕩かすものではないが、その味は辛く、その気は臭く、これ喫む人は、口臭が甚だ臭い。一つもいいところはない。男女淫奔の媒介を為して、やもすれば、大火事の場合数千軒にも被害がのぼる。そして現在の失火の半分は煙草の火が原因である。土地を無駄にし、肥料をつかい、金銭や技術的な面でも、費用はとても多い。国家はその問題点を鑑みて、慶長十三(一六〇八)年、令を下して禁じたが止まらなかった。元和二(一六一六)年には煙草畠を不許可にした。禁を犯す者は、牢屋に入れ、その人間を管轄する代官は過料五貫文、その村中の百姓一人につき過料百文までと命じたがやまなかった。ついには高貴の玩弄物となった。天然痘、煙草、キリスト教の遺した毒は、最もにくむべき者である。茶は煙草に比較すれば雅やかな物である。茶は嵯峨天皇の弘仁六(八一五)年、畿内及び丹波播磨等に分けて植えたのが始めだが、僧の栄西が帰朝の際に種子を持ち帰り梅尾の明慧上人に贈られてから、隠者の清賞の具となった。足利義政は、天下の治世に倦み、職を子の義尚に譲って東山東求堂に閉居して、銀閣を作り、鹿苑公足利義満の金閣に比較し、猿楽を修め、茶礼を愛したので、茶道は次第に世の中に広まり、茶道の名人も輩出した。その中でも太閤秀吉の頃、堺の千利休はその誉れがあった。古器の価値を判定し、後には私欲がおこり、親しさや疎遠の度合いや好悪によって、新しい器を古いものとしたり、贋物を真物としたり、心のままにふるまったので、太閤を怒らせ、召し取

って利休を誅殺した。茶道にとっては、稀代の人といわれるが、道徳的な教えから利休の行いを観れば、大いに異議のあることである。当時、二条院の御陵は洛北の船岡山にあった。ところが、利休はその塔石をとりよせて、茶享の飾りとして、残った石を使い、手水鉢などに使ったが、どう思ったのか、踏石にまではつかわなかったという。昔、周王朝が衰えたとき、楚子が鼎の軽量を問うたが、清議はこれを許さなかった。以下に朝廷の権力が武家に帰したとはいえ、天の日嗣はいまだ地に堕ちていない。宗易の茶が天下の観を極めても、伯夷は茶を酌むことはないと思える。文王は土中の枯骨を得ても、深くこれを埋め給いた。王者の政治は、正月には「骨を土で掩い肉を埋める」ように枯骨にまで思いは及ぶのである。加藤清正は身分は武士であったけれど、君主になってからは孤と称した。人がかしくみ仰ぎみたときに法に則ろうとして慎んだ態度をとったのである。しかし山科の元慶寺にいた僧侶遍昭の塔を本国寺勧持院に持っていき灯籠として、茶を喫むときに興の一部としたという。莫逆の点でいえば利休の下につくといえども、その任を考えれば、その身は君主として責任がある。国の繁栄が長くないのも理由のあることのように思える。茶道は義政に始まり利休に至った。その人を見てその道がなんたるか思うべきである。高貴な人が茶を賞味してから、ついに天下の日用品となった。精選されたものと粗末なものは品質を同じくしないといてもついには一日もかかせないものとなった。近頃では髪に油を用いるのと、神社に灯籠を点灯するのは、同じように止めがたい品となった。猿楽は、昔はただ奇怪でおもしろいことであったが義政が修行して観世観阿弥が案出して、能というものになった。武家が昔からの音楽を廃止したので、今は武家の音楽となった。これによって、当時の小笠原の礼とともに、いささかなりとも礼楽の備えになっている。さて三絃は、『小山の詞』という書物に「三弦をひく指は二つの鈎の手のようだ、一文を書いて玉娥児に贈った。」とあるので、元の頃からあると貝原益軒はいつている。しかしわが豊中に伝わっているところでは、永禄六年大友氏が石松検校を朝鮮に遣わせたが、航海中に暴風にあい、漂流して琉球に流れついた。その風習では蛇を避けるため、常に鼓や弓をひとりひとり弾いていた。石松はこれを習って、豊後に戻り、この楽器を作り、組という曲をつけて楽しんだが、広まったという。浄瑠璃は小野於通が、太閤秀吉から、紫式部や清少納言が著作をかいたのにならって、一書を献じるようにといわれたので、御前を退いて考えると、どうしても昔の文人の筆には勝ることはできないと思い、義経が東下りして、失作の宿の浄瑠璃御前という女に懸想して通ったのを、面白く作り直して秀吉に奉納したところ、とても気に入り、また当時の人々ももてはやしたので、後には節もつけて、色々昔の話を作り出し、西の宮の傀儡師と一体となって、操というものになり、また俳優がともに舞台にたった。俳優のことを歌舞妓といった。妓は女の名前だが、今の歌舞妓は男性である。慶長年間以前は、人が僧衣を身につけて鐘を叩いて、仏号をとらえた念仏踊りと

いうものがあつたが、慶長十九年の頃、名古屋山三郎という者が出雲の巫女で国という者と密通して、国に刀をささせ、頭を布でつつんで早歌を教えて舞わせたのにならつて、ついに男性が女の装いをして、また舞いをまた^{こび}煌を売ることになつた。寛永の頃、遊妓の禁が出てから特に盛んになり、しばしば女性に混じつてあやまちをおかした。このことで官職者は頭の髪を剃らせた。このため紫頭巾をつくつて首飾りをした。また宛然とした女性である。今はまた髪を長くして昔のようになった。踊り歌舞伎は、名は昔のようだが、実体は昔のようではない。このような物は、大きい事例であつて、小さな事例は教えることができない。しかし人情の赴くところを止めさせることはできないけれども、人は上一人より下億兆に至るまで天を敬し天に仕えることを忘れるべきではない。上の身分の者が施す所の者は広いが、下の身分の者が施す所の者は狭い。施しの広さは異なるとはいつても、分相応に、天に仕えることでは異ならない。天地の大徳を生といえ、生にもとるを不徳とする。ゆえに天地に生成する物を殺賊する事は最も天を畏れないことではないか。『書経』に無益をなして有益を害する事なかれと、聖人も警告しておられる。今の人の遊びは半分は無益で有益を害する。天地生々の徳にもとる事である。

もつとも国の始めに比較すれば田野も多く開けてきたし、それにまた人も増えた。今の世から昔を思うと、今節儉を尽くしても、なお昔での奢りに等しいのであろう。ましてや遊惰で奢侈を行えばどうなることか。だから今日庶民の厚生を図ろうとするならば、ただ儉勤廉恥の風習が重要である。儉勤廉恥の風習がおきなれば、制度は立たないからである。制度は則ち礼楽の道を説くと迂濶だといって人は笑うだろう。しかし国家長久、永世平安の道は、礼楽制度でなければ、立つことはできない。漢の高祖は、身分を匹夫から興し、秦を亡し楚をたおし、当時の豪傑を使役することは、赤ん坊を掌のうちで遊ばせるようであつたけれども、礼制が立たなかつたので、宴を行うときなどは、群臣が功を争つて、剣を抜き柱を撃ち、狼藉をとめることができなかつた。叔孫通はこのために、弟子と礼を教えたところ、ついに朝議をとりおこなつたさいには、またたく間に肅然として恐れ震え、大いに高祖を敬い身を謹しむようになった。高祖は大いに喜んで、自分まで今日の皇帝が貴いものであることを自覚したといわれた。高祖は昔の高祖のことである。秦や楚をほろぼした勢いさえも及ばない所を治めるのは、文の徳である。礼教は人を未然に治めるもので、政刑は罪は已然に戒める者である。すでにやったこと已然を戒めれば、民は免れて恥入ることはない。そうする前に未然に治めれば、恥入つてまた格式立って行動する。廉恥礼讓の風習がおきなれば、どうして利用厚生之道が行われるだろうか。ああ、孔子の聖徳をもつてさえ行われなかつたことなので、このように人がやろうとしないのもつともである。周公は礼楽を制作して、周家八百年の礎を開き、王莽は礼楽を制作したが、自分の身さえも保てなかつた。

礼はそれにふさわしい人を待つて行われるものであつて、ふさわしい人でなければ、事を混乱させるかも知れない。たとえ事を混乱させても、混乱させるのはその人の罪であつて、礼教の罪ではない。『詩経』にも「飲まし食べさせ教え」といい、『論語』にも「すでに富をもったものに、教えを行うことができる」といい、『孟子』にも「一定の生産がある場合は、かならず心の安定があるが、一定の生産がないときは心の安定はない」ともいつている。本当に子供は飢えると泣き、妻は凍えていることをどなるようであれば、人は全員が伯夷叔斉ではないので、どうして廉恥の操を保てようか。私はかつてまさに聞いたが、さる凶作の年に、貧しい民で飢える者が多かつた中に、某所の一人の民が、飢えに耐えられなくて、他人の田の蕪を抜いたのを、その持ち主が見とがぬたので、とても恥ずかしく思い、衣を打ちかぶつて臥してついには絶食して死んだという。このように意地がある人でも飢えや寒さには節操を保つことができない。このことをよくよく考えれば、罪は人々が自分が原因のようだと思うが、実は民の上に立つ人の徳によって起こるのである。だから主人たる人をはじめとして、これを補佐する者たちは自分自身を責めないことができるのだろうか。このために政は生活が苦しければ、貧らざるをえない。生活が豊かであれば、貪る心は薄らぐ。たとえば溺れている者を救うようなものである。自ら水に溺れている者は、子供が溺れていても顧みず、自ら舟中で安全であれば、猫犬の溺れているのを見ても打ちすてておく人はいない。ただ勢いの足りているのと足りていないとのちがいである。それゆれ民衆の生活を豊かにして、そののち礼讓廉恥の風習を唱えるべきである。民衆の生活が豊かといつても、礼讓廉恥の風習が興らなければ、華奢で奔放な生活になる。華奢で奔放になると財貨が足りなくなる。財貨が足りないからまた貪る。それゆえ賄賂の争奪がおこるのである。君主は家臣の表である。家臣は君主の影である。表が正しければ影は直る。表が傾けば影も斜めになる。

君主から態度が正しくなければ、訓令を行つてもそれは守られない。このように国家の長として社稷を守る人は、国家は祖宗の国家であつて、社稷は民の生活の社稷であり、自分の身を守るためではないのを知るべきである。天地の大徳を生という。生の徳を害する者はすなわち天地に逆らうものである。このために『漢書』に「本業に背いて末業に走り、食べるものが甚だ多い。これは天下の大残害である。淫逸奢侈の風俗が日々助長されている。これは天下の大賊である」とある。人は貴賤のちがいはあるけれども、等しく天地の子なので、大人も小人も、天を敬して仕えるには隔たりはない。天地の大徳を害するのは、最も恐れるべき事である。したがって各々、その分に応じて、残害を防ぎ賊をいましめることが重要である。そのことがすなわち経済である。いいかえると利用厚生正徳である。しかし利用厚生にどれだけよい道を得ても、自分で徳を正さなければ、布告で決まっていることや人々が好ましくおもうことに反するから民衆は従わないのが普通であり、礼讓廉

恥の風習はおこらない。いかなる良い計画や善い謀り事があっても、これを実行するにしたがって、下級役人や官僚たちの金儲けの手段となって、これを餌として悪人が財をかすめとり、人を虐たげて、今までになかった害を引き出し、功がないばかりか、世の笑い物となりはてしてしまう。このため、三事は利用してはじめとして、厚生を本体として、正徳を主としている。徳が正しいときには人は感化される。その指揮は水が谷に流れるがごとくである。なにができないことがあるか。君主はすなわち陶冶である。下々の者はすなわち土や鉄のようなものである。そこから器をつくり使用に適することは、まったく陶冶の手中にある。私はこの書ができてから後、桂秋齋の『間語』を手に入れて読むと、足利の頃の物価が載っていた。『間語』の中に『室町殿日記』が引用されていてそこに書かれている。

中間衆の木綿三十五疋を買いとり、船の役人船頭産三を通じ差し上げ申し上げました。おうけとりいただければさいわいです。こつま木綿は、いま一疋について壱匁六分二厘で売買されています。これもこつまに劣らぬ木綿であります。壱匁三分までですから、その旨お心得ください。

一、御局衆、はした衆が切米を十二石売却するように申し越されました。このごろ兵庫の売買は、一石につき六匁三分出すとのこと、すいたや新左衛門が申しました。その旨お心得ありますように申し上げます。

林 甚五郎

十二月二日

岡村忠左衛門殿
佐野権助殿
飯尾五左衛門殿

私の発言が妄言でないことを明らかにすることに十分であろう。それゆえこれを引用して、この書を読む人が考証するために提供する。

『価原』 終わり

